なにもかも話してあげる

ドロシー・アリスン

小竹由美子訳

晶文社

著者について

ドロシー・アリスン

一九四九年、十五歳の母の私生児としてサウスカロライナ州に生まれる。五歳から継父の性的虐待と暴力にさらされて育つ。九二年、自伝的長篇『ろくでなしボーン』（早川書房刊）発表。全米図書賞最終候補に。九五年刊の本書は、小説よりも凄まじかったとみずから語る実人生を明かしたもの。

訳者について

小竹由美子（こたけ・ゆみこ）

一九七六年、早稲田大学法学部卒業。香川県在住。予備校非常勤講師。

訳書―ウィルソン『みそっかすなんていわせない』（偕成社）

なにもかも話してあげる

一九九七年一一月三〇日発行

著者　ドロシー・アリスン

訳者　小竹由美子

発行者　株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二―一―一二

電話東京三二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替〇〇一六〇―八―六二七九九

中央精版印刷・美行製本

Printed in Japan

©本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（〇三―三四〇一―二三八二）までご連絡ください。

〈検印廃止〉　落丁・乱丁本はお取替えいたします。

なにもかも話してあげる

ドロシー・アリスン

小竹由美子訳

工业学院图书馆
藏书章

晶文社

晶文社　定価［本体1600円＋税］

ISBN4-7949-6333-5

C0098 ¥1600E

なにもかも話してあげる

ドロシー・アリスン　小竹由美子訳

晶文社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

Dorothy Allison :
TWO OR THREE THINGS I KNOW FOR SURE
Copyright © 1995
by Dorothy Allison
Published in Japan, 1997
by Shobun-sha Publisher, Tokyo
Japanese translation rights arranged with
Dutton Signet, a division of Penguin Books USA Inc.
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.

ブックデザイン　藤村誠

〔目次〕

なにもかも話してあげる……7
訳者あとがき……129

ドロシーと妹のアン、1956

「お話をしてあげる」

妹たちにこうささやいたものだ。赤土の豆の畝(うね)や列をなす苺のかげで、いっしょに身をひそめながら。妹たちの顔はやせてとがっていた。高い頬骨にたえまなく動く目。ママの顔、ドットおばさんの顔、わたしの顔とおなじ。百姓、それがわたしたちだ。これまでもずっとそうだった。わたしたちのことを下層階級と呼ぶがいい。下賤(げせん)の輩(やから)、労働者階級、貧乏人、プロレタリアート、クズ、下層民、人間のカスと呼ぶがいい。

わたしはそこから物語をつくる、わたしたちの物語を。おもしろい話や悲しい話、笑える話や忘れられない話を。伝説や光輝やロマンスで飾りたてて。

「お話をしてあげる」

こう言って、また一つお話をはじめる。子どものころ、妹たちがチョウチョを捕まえるように、わたしは妹たちを捕まえることができた。妹たちの注意を引きつけて、わたしの言うことはぜんぶほんとうだと信じこませることができた。

「家出した女の話をしてあげる。語りぐさになった家出女の話を、みんな聞かせてあげる」

大鍋で敵を煮る魔法使いの女王の話。ヌママムシの舌の裏にできる宝石の話。やがて、最高の満足を与えてくれるのは物語そのものになった。妹たちの顔に浮かぶ恐怖や笑いよりも大きな、それどころか、希望よりも大きな満足を。

子どものころ、いつも聞かれた。「どこに行ってたの?」「どこにも」と答える。継父も母親も信じはしない。でも、どんな罰もべつの答を引きだすことはできなかった。ほんとうに、わたしはどこへも行かなかった——実際にはどこへも行かなかったが、

想像の世界ではあらゆるところへ行った。歩きながら、自分に物語を語った。うちの敷地からよその敷地へとうろつきながら。ショッピングセンターまで行きつもどりつしながら。わたしの頬が赤いのを、万引きや悪ふざけで午後を過ごして後ろめたいんだろうとママは疑ったが、あれはただ、きまりが悪かっただけ。だって、歩きながら話していたのだから。物語を大声で、自分のつくりだした人間になりきって。ときにはもとの自分のままで、声をはりあげて考えを主張した。家ではとてもできなかったことだ。ときにはテレビや本に出てきた人間になって、聞いたこともないようなところに行った。まわりのだれもしたことがないようなことをした。とりわけ、女の子がやりそうもないことを。わたしがあらたにつくりあげた世界では、なにも禁じられてはいなかった。すべてが可能だった。

お話をしてあげる、たぶん信じちゃうよ。

グリーンヴィル郡総合病院の地下に実験室があってね、とわたしは妹たちに話す。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

赤ん坊が連れこまれるんだ。貧乏人の子だとね――まともじゃない家、まともじゃない肌の色、まともじゃない地区の子だとね――めちゃくちゃにされる。脳みそを変えられちゃう。そういうことがあったんだ。ほんとだよ。

信じる？

わたしは語り部。聞く人が信じるように話をする。いくらかほんとうのことを混ぜこんで、細かいところをちょっと変え、怒りというたしかなものを加える。無情な真実の世界で虚構を使うすべを、わたしは知っている。虚構をさらに無情な真実となすすべを。起こったことの物語、あるいは、起こりはしなかったけれど起こるべきだったことの物語――そういった物語は、さえぎる幕になってくれる、障壁に、隠れ蓑に、剃刀に、使うたびに変わる道具に、ときに思いがけないものとなる道具に。

物語は、こちらが必要とするものになってくれる。

二つか三つ、たしかに知ってることがある。その一つは、自分でつくる人生しか愛さない、それはどういうことかってこと。

お話をしてあげる。自分を納得させられるなら、あなただって納得させることができる。でも、はじめ、あなたはいなかった。わたしが納得させようとしていたのは、あなたじゃない。はじめはただ、悪夢と欲求と不屈の決意があっただけ。

はじめはただ、話しながら物語をつくっていくことが生きのびる手だてになるかもしれない、そういう思いがあっただけ。そして、もしわたしがなにか知っているとしたら、それは、どうやって生きのびるかということ、どうやって物語のなかで世界をあらたにつくりあげるかということ。

けれども、わたしは、自分の語る物語のどこにいるのだろう？　語り手ではない。物語のなかの女、物語を信じる女だ。その女については、なにが真実なのだろう？彼女も仲間、家出した伝説の女たちの一人なのだ。魔法使いの女王、戦う乙女、キャンバス地のスーツケースを下げた母親、骨の折れた娘。女たちはやむにやまれず家を

出る。わたしが家を出たのは、そうしなければ死んでしまうからだった。自分の世界を引きずっていくことになるとは、だれも教えてくれなかった。出ていくことが習性になるとも教えてくれなかった。出ていく秘訣は、なぜ出ていくのか、行くあてはどこなのかわかっていること――そして、出ていく原因を置いてくることなのだということも。

ママは出ていかなかった。ドットおばさんもグレースおばさんも、一ダースちかくの子どもをかかえたいとこのビリーも、だれも出ていかなかった。彼らは柔軟性や決断力を身につけ、つらい妥協でなにが犠牲になるかを学んだ。彼らのだれも、自分や

母ルース・ギブソン、1952

子どもの命をなくすつもりなどなかった。つらい妥協の罠に落ちて、自分がだれか、最初はどういうつもりだったのかもわからなくなるほど苦しむことになるとは、思ってもいなかった。でも、そうなった。何度も何度もそうなってしまった。

こう言ったのは、ドットおばさん。

「まったくね、二つか三つだけさ、たしかに知ってることなんて」おばさんは頭を反らすと、にやっとして、気ぜわしそうに咳ばらいした。両の目が輝く。ヌママムシの背中のうろこにきらめく日の光のように。ぺっとつばを吐いて、おばさんは肩をすくめた。

「二つか三つだけ。そうさ」とおばさん。「もちろん、いつもおなじじゃない。それに、自分で思うほどたしかでもないんだけど」

わたしが生まれたところ、サウスカロライナのグリーンヴィルには、ほかのどの場所ともちがうにおいがあった。湿った刈草、割れた青リンゴ、赤ん坊のうんこにビー

ル瓶、安物の化粧品にモーターオイル。なにもかもが熟れ、なにもかもが腐りかけている。猟犬どもがふくらはぎにすりよる。遠くでだれか叫ぶ。こおろぎの鳴き声が耳に響く。美しいところだった、ほんとうに。いままで住んだなかで最高に美しいところ。美しくて、恐ろしいところ。そこはわたしの夢の土地、そしてまた、悪夢の土地。澄んだピンクとブルーの空。赤い土。白い粘土。あの限りない緑——ヤナギやハナミズキやモミが何マイルもつづく。

二つか三つ、たしかに知ってることがある。その一つは、あまりよくわからないものを、どうやったら憎みかつ愛することができるかということ。

グリーンヴィルでのこと。四年生のなかばに、大学出たてでアイディアいっぱいの代用教員がやってきた。彼女はまずレコードプレーヤーを持ちこんで、フォークソン

ドロシー(左から二人め)といとこたち、1952

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.